

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

3か月ごとに開かれるサポート会議と全ベース会議も、それぞれ、47回と34回目を迎えました。今回は、会場に福島市野田町にあるカトリック野田町教会をお借りし、福島の各小教区での支援活動状況について、お話いただきました。震災から7年5か月が過ぎると、被災地の状況も、ニーズも変化し、それに対して、各地での活動も少しずつ変化していかざるをえない状況に立たされています。福島の現場、サポート会議、全ベース会議の出席者たちの真剣な話し合いの幾分かでもご理解いただければ幸いです。

第47回サポート会議・第34回全ベース会議

仙台教区サポートセンター 濱山 麻子・長谷川昌子

8月24日(金)、福島市の野田町教会を会場に、第47回仙台教区サポート会議と第34回全ベース会議を行いました。サポート会議は3か月に1度のペースで、主に仙台市の元寺小路教会を会場に、全国の復興支援担当の司教様、中央協議会の復興支援室、カリタスジャパンからの出席を得て行われています。今回は、福島県で支援活動を行っている小教区、グループ、修道会の皆様に、活動を通して感じておられる福島の現状について事前にアンケートを行い、それをもとにお話を聞かせていただきました。



◆原町教会

震災後2年目から「コンコルディア」として活動。教区からの支援金、原町教会の宣教司牧費をもとに仮設住宅集会所での手作業の会を開いている。7年経った今になって、津波による被災の体験を打ち明ける人がいる。参加する人が減るかと思っていたが、増えている。原発事故による帰還困難区域がまだまだ広い範囲にあることが、全国で理解されていない。県外では報道が少なくなり、全国的に災害が頻発している中で、7年前のことが過去のことになっている。他の地域で災害が起きたとき、どうなるのかと考えてしまう。今年の夏は特に暑く、冷房の使用が呼びかけられているが、それでも電力不足とは聞かない。原発に頼らなくてもいいのではないかな。

小高区では、避難指示が解除されて戻ってくるのは高齢者が多い。集まるメンバーも7年歳をとった。活動している私たちも被災者である。活動の辞め時が分からない。健康なうちは続けなくてはと思っているが、悩みの種は人材。教会信徒に限らず、集まってくるメンバーの中で、リーダーを見つけることも考えている。

◆松木町教会

「コスモス宮代」は宮代仮設住宅でかつて暮らしておられた方々。2016年頃から、仮設を出られる方が増えたが、当時まだ仮設住まいの方、もう出た方にも平等に呼びかけたいという思いから、そのような呼び方にした。仮設訪問をずっと続けてきたが、仮設閉鎖に伴い、コスモス宮代の皆さんに、今後どのようなことを望んでおられるかアンケートをとった。これからも集まりたいという答えを受けて、中通りと浜通りで交互に同窓会的な集まりをすることになった。



集まりに出てくる人は元気で、こちらを力ももらっている。出てこられない人が大変だろうと、最近お会いしていない方のところには直接出向いている。また、2015年に宮代仮設住宅の自治会が解散した後、「カリタスからのおたより」を毎月発行して皆さんに配っている。今年から、コスモス宮代の方からの声、ボランティアからの声も掲載している。

原発事故に関しては、私たち中通りの住民も被災者である。避難されている方と、「福島とともに生きる」という思いである。

◆野田町教会

相馬市の災害公営住宅「井戸端長屋」を訪問している。ハンドトリートメント、足湯、ハーブティーの提供をしながら、和やかに過ごし、また1対1で向き合ってお話を聞いている。必ず被災体験をお聞きする。教会の中では「相馬支援」ではなく「相馬訪問」と言っている。必要とされなければいつ止めても良い、と思っているが、今も求められている。細く長く続けていきたい。また、帰還困難区域を訪ねる機会があり、家々がバリケードで封鎖されている痛々しい様子を見てきた。原発事故を忘れてはいけない。復興が進んでいる面もあるが、いまだに風評被害も続いている。そのギャップをなんとかしたい。



バリケードによって立ち入りができないようになっている帰還困難区域

～カリタス南相馬 Facebook より～

◆郡山教会

川内村から避難して来られていた方々の仮設住宅への支援をしていたが、仮設が閉鎖され住民が皆帰還された。この春に野菜配りをして以来、支援活動は足踏み状態である。「まだ被災者として見ているのか」という声もあり、宗教への引っかかりもあるのかもしれないと感じている。教会内では、復興関連だけでなく、子ども食堂など身近な問題、自分たちの足元を見て活動をしたいという声がある。



限られた時間の中、現在の活動などを説明して下さった皆さん

◆いわき教会

「チーム平・堂根」としていわき市内の津波被災者への支援を続けている。仮設住宅は早い段階でなくなり、2か所の公営住宅での出張カフェをそれぞれ隔月1回行っている。さいたま教区の「もみの木」は大熊町、榎葉町からの原発避難者を支援しており、いわき小教区圏内である両町の住民のための活動を、いわき教会としてはしてこなかった。今年8月に着任された狩浦神父様の了承を得て、この度、教会としてさいたま教区と一緒に原発避難者のための活動も始めようということになった。

◆NPO福島やさい畑～復興支援プロジェクト～

福島の問題は自然災害ではない。壊れたものを直せば済む問題ではない。高齢者は亡くなるまで、子どもたちは成長して結婚し、五体満足な子どもを産めるまで見守るべきである。やさい畑では県内の農家から野菜を買い取って、首都圏はじめ各地での直接販売、また通販をしている。いまだに福島の農家は風評被害が続き、買ったたきがされている。震災前のお得意様がなくなったので、新規販路を開拓している。

生活困難者支援も行っている。仮設住宅へ入る時に、それまで3世代同居していた家庭がバラバラになり、高齢者世帯が多い。この7年で伴侶を亡くした方も多し。野菜販売をしながら1軒ずつ訪問すると、家の中に話し相手がいないので、お話が止まらなくなる。野菜だけでなく、フードバンクの品を届けながら孤立防止をはかっている。復興公営住宅では、仮設と違い家賃が発生するため、生活は楽になっていない。

家庭状況が様々で食事ができない子どもたちのため、二本松市内の2か所の子ども食堂に野菜支援をしている。福島全体の生活困窮者を支援している。また、太陽光発電の取り組みも始めた。太陽光発電については反対の声もあるが、では原発に代わるものは何か？と問いたい。



◆いぶき宿

「いぶき宿」は、息が通い合う宿を意味している。原発事故が起きたとき、正義の味方が来て、助けてくれると思ったが、だれも来てくれなかった。人々が戻ってくると思ったが、だれも戻って来なかった。福島は農業でなりたっている。しかし、その大切な土が被害を受けている。そのままにしておくと、日本人もダメになる、というので、有機農業を始めているのが「いぶき宿」。私は、1月に1度、ここに来て活動している。

そこで、私が主にしていることは、有機農業人形劇である。これは、原発事故前、原発事故後、未来に向かっての3部作である。

どのように命を守っていくか、ということは、教皇フランシスコが出された回勅『ラウダート・シ』で言われていることでもある。

◆イエスの小さい姉妹の友愛会

観想修道会として福島に生き、祈る生活をしている。国際修道会なので海外からの人を浜通りに案内しているが、現状が知られていないことを実感している。

◆きらきら星ネット

東京周辺に避難されている方々を交流会や遠足・保養・ピアノ教室・裁判傍聴などを通して支援している。山形県米沢市への避難者の集まりの際に、おみやげとして渡す物資提供の呼びかけをしている。子どもたちへの支援、声を上げたお母さんたちへの支援を行っている。福島ランチ会やいわきランチ会も行っている。

◆カリタス南相馬

屋外活動としては、社会福祉協議会からの要請でボランティアを派遣している。最近浪江町での活動を行っている。高校生のボランティアの参加もあり、今年は六甲学院、広島学院などが来ている。先日は7年間手つかずの状態だったビルの片づけ作業に行き、2011年3月11日で時間が止まったままの状況を目の当たりにした。広島から来た生徒たちは、「今年は地元の豪雨災害の被災地に行くべきかと迷ったが、福島で絶対に学んで帰る」と言って参加してくれた。活動後、夜には放射線についての勉強会をした。

福島の問題は全国に活かされていない。原発は止まっていればいいのではない。電源がダウンすれば、全国で同じ状況になりえることを知ってほしい。現地で自分の五感で感じたものを皆に伝えてほしい。



いまだに手つかずの場所（浪江町請戸周辺）

～カリタス南相馬 Facebook より～

ご出席の皆さんからの発言、質疑の後、総括として中央協議会復興支援担当の菊地功大司教様から「この20数年の間に、様々な災害が起き、そのたびに大騒ぎになるが、6か月単位で人々に忘れ去られ、それによって解決されたことにされてしまう。しかし、10年、20年経っても、人生を大きく変えてしまったことは元に戻ることがない。司教団では発災から10年の2021年まで支援することを決めているが、10年で全てが解決するとは思っていない。10年目以降のことを今から少しずつ考えていかなければならない。福島で起きていることは、沖縄と同じように感じている。一つの県に問題を預けて、県内に分断をもたらしている。日本の司教団は原発反対をはっきりと表明しているが、その声をもっと強めていきたい。教会全体として、どうやってこれからの未来に関わっていくかを考えなくてはいけない」という言葉がありました。



被災された方々と直接向き合い、関わりを持ち続けている中で、「今、このつながりを断つわけにはいかない」という思いと、その一方で体力の限界や後継者不足に直面し「いつまで続けたらいいのだろう」という悩みは、福島に限らず、各地で支援活動に携わっている方々の誰しもが抱えている矛盾であると思います。原発事故は、コミュニティの断絶、拭い去ることができない不安感を生んでいます。今回、お話をしてくださった福島県の小教区、グループの皆さんは、自らも被災し、他の地域から避難して来られた方々と共に暮らす中で、迷いながらも活動を続けておられます。

今回の会議を通して、私たちは「福島の問題は『難しい』」という言葉で括り、踏み込まないように、忘れてしまおうとしてはいないか、と感じました。東日本大震災と原発事故から7年6か月が経った今、被災地はどうなっているのか、原発事故がもたらしたものは何だったのか、一人でも多くの方に、現地に足を運んで知っていただきたい。ボランティアとして福島で何ができるか、ということだけではなく、この先の未来のために、私たちが何をしなくてはならないかを考える、大きなきっかけになることと思います。



●第34回全ベース会議

午後には、サポート会議と別室でカリタスベース関係者による全ベース会議を行いました。宮古ベースは、この春から宮古教会信徒が主動して教会で開いているカフェについての報告のほか、2016年9月の豪雨災害被災地である岩泉町では、被災者が仮設に入居しておよそ1年が経ち、東日本大震災の被災地の6年前と同じ状況にあることが報告されました。カリタス釜石からは、復興公営住宅入居を目前にして亡くなった方の家族など、変化が見られる家庭を中心に戸別訪問を行っています。大船渡ベースからは、南三陸ベースと協働で実施している東日本大震災応援ツアーが好評を得ていることが報告されました。石巻ベースでは仙台・塩釜地区の「チーム・カリタス仙塩」による日帰りボランティアが主力となり、オープンスペースでの活動が続いています。

この他、各ベースが開いているサロンでの個別対応に関する悩みの共有や、仙台教区サポートセンター、カリタス南相馬の現地見学ツアーの企画について話し合われました。



●第47回仙台教区サポート会議

サポート会議の出席者は、日本のカトリック教会が大震災を被った仙台教区の支援サポートをするために立ち上げられたもので、日本の3教会管区から、担当司教と定められた司教たちを中心に集まってい

ます。菊地功東京大司教が、日本カトリック司教協議会（CBCJ）仙台教区復興支援担当となっています。

出席者は、平賀徹夫司教（仙台教区司教）、菊地功大司教、幸田和生司教（東京管区責任者）をはじめ、瀬戸高志神父（カリタスジャパン秘書）、上杉昌弘神父（宮古ベース責任者）、小野寺洋一神父（仙台司教総代理、仙台教区サポートセンター事務局長）、ミゲル・バレラ神父（カリタス仙台担当）、神田裕神父（CBCJ仙台教区支援担当補佐）、田所功氏（カリタスジャパン事務局長）、その他3人のオブザーバーが出席しました。



各教会管区の代表からの報告に続いて、発災後10年たつ2021年3月末以降、どのようにするかについて、意見交換が自由に行われました。

10年後をどうするか

・小教区活動を中心にした復興支援活動になるのではないのでしょうか。それに、全国の教会が姉妹関係を結び、コラボレーションする形で助け合っていくといいのですね。

・一方、ベース同士がネットワークを組み、活動していくという形は続くと思われます。

・信徒は高齢化して、働き手が少なくなっていたが、被災者の方々の中から、手伝ってくださる人が現れた、と午前中、福島・原町教会が発表されたように、教会のメンバーだけを考えるのではなく、町の人を巻き込んで、活動していくことによって可能になることも考えられます。

・神戸は新生と言い、仙台は創造と言って、新しく出発しました。これが大切です。

・福島は今復興中です。福島での復興活動は長い時間がかかるでしょう。松木町教会の「愛の支援グループ」は震災前からあり、震災を受け、宮代仮設での活動を始め、その後のコスモス宮代となって今も続けておられます。二本松教会も、復興支援のため、農家を支援してきた。今は生活困窮者のためのフードバンクにも広がっている。地域に開かれた教会の実践編が今おこなわれており、それを身につけている。

・小教区でのローカルの中での人とのつながりは、教会が存続するかぎり続いていく。大きいことである。神戸もローカルな人が今も続けている。小教区の活動は、普段していることが生かされて、形が変わって続けられる。それで本望ではないのでしょうか。

・小教区はローカルですが、カトリック教会と結ばれることによって、グローバルな視野で見られるようになります。それで、ローカルで動けるということも言えるのではないかと思います。

・大震災が起こったことは、つらいことでしたが、使命を思い起こすこととなりました。支援活動を教会の活動として展開することとなったのですが、それを10年で終わらせることはできないでしょう。もっとつながっていかねばならなくなると思います。神田神父は神戸・たかとり教会でローカルに根ざし、教会が開かれた場になるのだということを見せてくださっています。これが、仙台教区の小教区でも見えるように、その学びの場をしたらよいと思っています。

以上のような話し合いの後、次回12月の会議を確認して終わりました。